自転車の荷台

橘　まおしん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
自転車の荷台

【Ｎコード】
Ｎ８３９２Ｓ

【作者名】
橘　まおしん

【あらすじ】
自転車の荷台に乗せたあいつ・・・。
そんなあいつが忘れられなくて、星空を眺めていた。

（前書き）

恋愛小説です。
何となく、書いてみたくなったので書いてみました。

高校卒業と同時に、クラスの連中は進学や就職とそれぞれの道を歩き出した。
それは俺も勿論同じで、家の近く大学に通う事になった。
勉強が嫌いな俺が1年勉強して入れた大学だ。そんなに学力は高くないが、自分の進路を決める4年間には丁度良いと思う。
生まれてから19年間、俺はこの街を出てない。何だかんだ好きなんだろうなこの街が。

大学の近くにあるコンビニに俺は立っている。時間は21時を過ぎていた。
俺は煙草に火を付けて一服をする。
「ふぅ〜・・・」
備え付けの灰皿の横で空を見上げていた。考える事は特にない、此れが癖のような感じだった。
大学に通い始めて、早3ヵ月が過ぎた。
俺は高校1年から勤めるガソリンスタンドを続けて、その帰りだった。

何だろうか・・・たった3ヵ月前の事なのに妙に懐かしく感じる。
不思議な感覚だ。
高校時代は、ある女の子が好きだった。
渋谷に居そうなギャルメイクをして、とても可愛らしく笑う子だった。
彼女に出会ったのは高校1年の時、別のクラスなのに仲良くなった女の子の友達として現れた。
ギャルメイクは結局3年間変わらずだったな。
彼女とは良く話しが合って、すぐ仲良くなれた。彼女には2つ上の

彼氏がいる事も知っていて、俺は其れを聞いてすぐにこいつとは付き合えないんだと思ってた。
そんな何も特記することのない出会いから俺は彼女と友達関係のまま時間が過ぎた。
たまに一緒に授業をサボったり、駅前の人が居ない所で煙草を吸ったり。
登校の時に会うと俺の乗る自転車に乗って学校へ向かったり。

本当に何気ない日常を彼女と送った。
彼女の彼氏は違う学校で今年卒業して就職するという話になった時は話を聞いてあげたりもした。
俺が違う女の子と付き合うとデートは何処がおススメだとか教えてもらったりした。
そんな関係が崩れたのは高校3年の春。
彼女の友達の盛屋という子と仲が良くなった。
大人しい感じの女の子で学校で一番可愛いと評判だった。
彼女からは脈ありと聞いていたが、何故か自分から踏み出せずにいた俺に彼女は・・・
「イケるよ！付き合えるって！佐緒里の事好きじゃないの？」
この三拍子だった。

「いや、好きだけどさ・・・なんか、違うっていうか」
「ナッツ見てるとお似合いだってわかるんだって」
彼女に押されて俺は守屋を大分意識していた。
確かに可愛いし大人しい良い子だけど、俺に合うのか？
話は合うしよくメールもするが・・・。
「あと一歩だって！」
「・・・はいはい。頑張ってみるよ」
彼女とは友達だからよく話しもする。

けど、メールと電話は未だに知らない。彼氏が束縛するタイプで男のアドレスがあると嫌がるそうだ。
そう、俺達は見えない壁があった。
どんなに学校で仲良くしようが、メールも電話も出来ない関係。
それが俺達。暗黙のルール。

盛屋はよくメールをくれるし、電話もたまにする。
他愛もない話や最近の流行の話をして、笑い合う。其れだけでも俺は楽しかった。
そう、友達のままで良かったんだ俺と盛屋は・・・・

「は、話って・・・・何？」
「・・・・あのね、ナッツくん」
「お、おう」
「好きです・・・・付き合ってください」

俺は盛屋と付き合う事になった。
確かに好きだった。だから・・・

「ねぇ、ナッツくん。明日映画見たいな」
「おっ、いいな」
そんな会話をしている俺達に彼女はニコニコしながら話掛けてきた。
「お～ラブラブ？」
「見りゃわかるだろ？そうだよ！」
「はは～ん、ナッツ。あたしに感謝してよね？」
「何でだよ！？」
「協力したぢゃん！」
「はぁ？」
そんな彼女との会話をする俺を見て、盛屋は笑っていて、俺もそれに応えて笑う。

それが学校での俺達だった。
盛屋は気を遣って笑ってたなんて、あの時の俺にはまったくわからなかった。

デートの帰りにそれは突然起きた。
彼女のアパートまで送るとその日の様子が少し違うなっと思った俺は聞いてみた。
「ナッツくんさ。もしかして、私より・・・・の事が好きじゃない？」
「はぁ？何でだよ。そんな事ないよ。それにあいつ彼氏いるし」
何でそんな事を言うんだろうって思った。
あいつは友達でメールも電話も知らないのに・・・。
「私、二人を見てていつも羨ましいんだ。二人の会話聞くと和むっていうか、、、でも其れと同時になんかとても辛いの」
「・・・・・」
一番仲が良い女の子だからって頭の中に浮かんだけど結局俺はそれを口に出来なかった。
盛屋を傷つけるとわかっていたから。
「私、何ヶ月も耐えようと思ったんだけどやっぱ辛い・・・」
「ご、ごめん。あいつとはあんま話さないようにするから」
「いいの、そんな事望んでない。二人の関係を崩さないで」
俺は盛屋が望んでいる事がわかっていた。
彼女は俺に彼女に気を遣っていたんだ。
だから、俺との関係を終わらせようとしてると・・・。

何でだろうか。こういう時人は変な勘が働いてしまう。
俺達はお終いなんだと・・・。

「ナッツくん、別れよ？」
「・・・・」

こうなった関係をどうやって直せばいい？
俺にはわからない。盛屋は泣いて、俺は黙り込むしかない。
俺がいけなかったのだろう。彼女が出来たのにあいつと喋るのが楽しくて、彼女を置いてけぼりにしてしまってた。
「・・・・うん」
「・・・・・・・グスッ・・・・・・じゃあね」
「・・・・・・ああ」

盛屋は泣きながらアパートの中へ消えていった。
今、追えば何かしら結果が出るかもしれないのに俺はそこで立ち尽くしたまま。
地面を見ているしかなかった。

自転車で家まで帰るのに２５分程。兎に角、憂鬱というのだろうか何も考えられない。
気付けば学校の近くを自転車で走っていた。
近くにある公園に寄って、気持ちを落ち着かせようと思って自転車を降りる。
公園の階段を上ると人影があった。
俺は、学校の仲間内の誰かだと思ったがどうやら女の子ようだった。
「・・・ヒック」
その子は泣いていた。
小さな声で弱弱しい声で・・・・。

そしてすぐにわかったんだ。それがあいつだと。
「お前・・・こんなとこでなにしてんだ？」
「・・・・・・ナッツ？」
声をかけられた彼女は手で押さえていた顔を此方に向けてきた。
相当、泣いていたのだろう。
メイクしていた顔をグチャグチャになっていた。

「どうした？」
「・・・・彼氏にね・・・」
どうやら、彼氏と喧嘩をしてしまったらしい。
電話を切られてから連絡が付かないという。
それからこのまま別れるんじゃないだろうかと思っていたら案の定、
メールが来たという。

「とりあえず、ここにいろ」
と言って近くの自販機でコーヒーを2本買ってくる。
「ほら。これでとりあえず落ち着けよ」
「グスン・・・ありがと」

今、彼氏と別れたあいつは俺と同じだと思った。
何も出来なかった俺、その場で立ち尽くす俺。ヘタレだと・・・。
「俺、盛屋と別れたんだ」
「えっ？」
「何か、俺がお前と楽しそうに話してるのが辛かったみたいでさ。
俺はそれに気付いてやれなかったんだ。盛屋にはお前の事が好きな
んじゃないって言われてさ」
「・・・・」
「あいつには彼氏がいるだろって言ったんだ。それでも、盛屋はも
う心を決めてたみたいで結局駄目だった」
「そっか・・・。・・・・・ねぇ、彼氏がいなかったら？」

お前に彼氏が居なかったら、多分どこかで告白してたのかな？
彼氏が居なかったら告白を断ってたのかな？

「多分、お前に告白してるんじゃないかな・・・」
「・・・・・」
「でもさ、お前にはまだチャンスがあるじゃん！電話でもメールで

も別れたくないって自分の気持ちぶつけろよ！」
「でも・・・・」
「俺は盛屋に別れ告げられても何も出来なかったんだよ！でも、お前はそうなるよ！絶対後悔するから！！」

何であそこで俺はあいつの応援しちゃったんだろう。
どうして、俺と付き合えって言えなかったんだろ・・・
周りが気になるからだろうか・・・？

それからあいつは彼氏にメールと電話を掛けて、何とか仲直りが出来た。
俺はその間ずっと傍にいた。
その時の夜空は、雲ひとつなくて三日月と星が俺らの座るベンチを照らしてた。
静かに、優しく。

あいつとはそれから段々と喋らなくなった。彼氏と順調に言ってるみたいだし、盛屋もその近くにいたから。
俺は静かに二人の中から消えていく事を望んだんだ。
でも、俺はあいつを思う気持ちは消える事はなくて、寧ろ強くなってしまっていた。
そんな想いも伝える事なく、俺達は卒業してバラバラになった。

今日の星空はあの日に何処となく似ていたんだ。
だから、多分昔の事を思い出したんだと思う。

「さて、行くか・・・」
灰皿に根元まで吸った煙草を捨てて、親友の家に歩き出す。
コンビニの袋の中には2本のビールとリプトンがある。
これから、一本ずつ呑んで語る。俺達のお決まりなパターン。

今日は思い出した昔話を親友に話してやろう。

「ナッツ！！」

ふいに呼ばれた。後ろから・・・・いつも変わらない声で。

振り返るといつものメイクで・・・・髪は少し明るくなっていて・・・・。

でも、前と変わらない笑顔があったんだ。

何で、お前がそこにいるんだろう。

彼氏と一緒か？

でも、そんな事もうどうでもいいんだ。

名前を呼ばれたのが嬉しくって。

その笑顔が見れたのが嬉しくって。

思わず俺は呼び返しちまった。

「由希！！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8392s/

自転車の荷台

2011年10月9日00時29分発行